

---

# ボクと仲間と召喚獣

七海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボクと仲間と召喚獣

### 【Nコード】

N7132W

### 【作者名】

七海

### 【あらすじ】

ここ、文月学園に通う吉井明久、姫路瑞希、坂本雄二、霧島翔子は自他共に認める仲良し4人組み。振り分け試験でトラブルがあり、全員成績最低のFクラスに振り分けられてしまった。そして、明久たちは試召戦争始めることとなった。

## 設定（前書き）

初投稿です

駄文かもしれませんがよろしく願います> ( | | ) <

## 設定

この小説は………

CPは明久×瑞希、雄二×翔子です。まだそのほかにも考えられています。

少し、美波に対しての扱いがひどくなるかもです。

明久、瑞希、雄二、翔子は幼馴染で仲がよく、全員頭が良い設定になっています。

## オリキャラデータ

名前 礎 悠太

性別 男

身長 175? 体重 59キロ

特技 水泳（全国トップクラス）

好きなもの 甘いもの 友達

成績 第2学年学年主席

翔子の1年のときのクラスメイト。成績は互角  
だいたい一教科の科目は450〜480くらい

性格 人見知りをしなく、友達は全員呼び捨てにするほどフレ  
ンドリー

容姿もとてもよいのでモテる。だが、優子に好意を抱い  
ている。

容姿 茶髪で秀吉のすこし短くしてところどころはねている

召喚獣 騎士に海賊がもっているような刀。

腕輪は 「炎」 相手のまわりに火の輪をつくり逃げ場をなく  
する

一回につき100点消費

## 設定（後書き）

アドバイスなどおねがいします

ボクと過去とみんなとの出会い！（前書き）

明久たちがであつた話です

ボクと過去とみんなとの出会い！

~~~~~NOSIDE~~~~~

ここは、長月公園、そこに少女と少年がいた。

「・・・ねえ、さつき雄二が話していた。大化の改新っていつのこと？」

「三年生にもなってそんなことも知らないのか？」

「・・・まだ習ってない。雄二の頭が良すぎるだけ。」

「覚え方は、『無事故の改新』で覚えるんだ。」

「・・・無事故？」

「忘れるなよ。大化の改新は無事故でおきたから、



「625年だからな。」

「・・・わかった絶対忘れない。」

「なんだこれ？」

雄二が地面にあったウサギのヘアピンをみつけた。

「・・・どうしたの？雄二」

「いや、地面に、ヘアピンが・・・」「瑞希ちゃんヘアピンを今日もがんばってみつけようね。」

それを遮るように、ピンクの髪をしたふわふわした印象の少女と、茶髪の明るい印象の少年がきた。

「ありがとう。明久君。今日は絶対見つけようね。」

「なんだあいつら？・・・もしかして」

雄二は自分がもっているヘアピンを探そうとしていることに気付いた。

「・・・雄二？どうしたの。」

「悪い、翔子。ちょっとまっててくれ。」

「・・・わかった。」

~~~~~明久SIDE~~~~~

ボクと瑞希ちゃんが瑞希ちゃんのヘアピンをみつけようとしていると、赤い髪をしたボクと同じ年くらいの男の子がこっちにむかってきた。

「おい。お前ら。」

「君は誰？」

「それよりも、もしかしてこのヘアピン。」

男の子が見せたのは瑞希ちゃんが一昨日落としたヘアピンだった。それをみた瞬間、こいつが盗んだんだ。そう思った。

「さっきこのヘアピンを・・・おい！なんでお前がもっているんだー！」

「はあ？いやお前人の話をき」やってもいいことと悪いことがあるんだぞ！」

ボクは男の子のことをいうことを無視し怒った。

~~~~~雄二SIDE~~~~~

俺はこいつにお前が盗んだみたいなこといわれて、カチンときた。

「おまえふざけたこというんじゃないやねえよ！勝手に決めつけんじゃないー！！」

「ふざけてんのはおまえだ！瑞希ちゃんの大切なものを盗みやがって」

「だから違うつていつているだろ！」

そしてふざけたバカと口論になっていた。そして殴り合いまでに発展していた

「あ、明久君落ち着いて！」

バカといっしょにいた女の子が止めようとしたが、バカには聞こえなかったみたいだ。

「・・・・・・・・待つて！」

「翔子！ばか、さがってろ」

「そつだよ、きみはさがってて」

「・・・・・・・・雄二はこのヘアピンをひろっていた。わたしもみたから間違いない。」

翔子は凜とした声でそう言った。

「えっ、そうなの？」

「・・・・・・・・それが納得しないならケンカなんかせずにきちんとお互い話すべき。」

その言葉を聞いてバカとお互い話をした。



ボクと過去とみんなとの出会い！（後書き）

翔子の性格をちょっと変えました

ボクと過去とみんなとの出会い？（前書き）

続きです

更新遅くてすみません＞（――（――＜

ボクと過去とみんなとの出会い？

――明久SIDE――

ボクは女の子がいったように男の子と話した。

そこでボクは分かった。

男の子は嘘をついていなくてボクが悪かったということ。

まだ子供だけど、後悔した。

ともかく謝らないと、と思った。

「あ、あのさ、ごめ「いや、こっちこそ悪かったな……」

「え？いや、ボクのほうが悪いんだから……」

「いや、俺も翔子の言うとおりにきちんと話すべきだったな」

「「ごめんなさい」「

ふたり同時に謝り、気が付いたらお互い笑いあったいた。

「そつえば、名前聞いてなかったね。君たち名前はなんていうの？」



「俺は 長月小学校小3で、坂本雄二。で・・・こっちは・・・」

「・・・霧島翔子。よろしく」

「うん。よろしく。ボクは睦月小学校小3の吉井明久だよ！」

「私は姫路瑞希だよ。」

「へえー。同じ小3なんだな。気が合いそうだ。」

「それより、坂本雄二ってあの神童のだよね？」

「まあそうだけど・・・けっこう広まってるんだな。」

「そ、そんな人と友達になれるなんて。」

「まあ、よろしく。」

「よろしくね。雄二、翔子ちゃん。」

「え、呼び捨てか・・・」

「そんなの普通だよ。だって友達だよ。ね、瑞希ちゃん」

「そうだね。じゃあ私もそう呼ぶね。よろしく。雄二君、翔子ちゃん。」

「まあそうだな。あ、そうだ。瑞希、これヘアピン。すっかり忘れてた。」

「あ、ありがとう。」

「……まだ時間があるから、みんなで遊ぼ。」

「そうだな。じゃー缶けりでもするか!」

「」「さんせい!」「」

~~~~~

これが、ボクらの出会いだった。

そして、ずっとあの公園で4人で遊んでいた。

中学は、雄二は霜月中の推薦を断ってボクらと同じ中学校にいた。

とてもうれしかった。

そして、高校は文月学園に、ボクは、頭の良い3人に囲まれていたため、最下位の成績から、Aクラスの下位並みの成績に成長した。

そして、1年の3月2年のクラスをきめる振り分け試験が始まった。

**ボクと過去とみんなとの出会い？（後書き）**

なんとか、過去終わりました。

アドバイスや感想をお願いします。

## ボクと波乱と振り分け試験

~~~~~明久SIDE~~~~~

今日は振り分け試験だ。

大丈夫、雄二達に勉強を教えてもらったんだ。

みんなといっしょのクラスになれる。

そう信じて文月学園に向かった。

途中歩いていると、幼馴染たちに出会った。

「雄二、翔子ちゃん、瑞希ちゃん、おはよー！」

「ん、明久じゃねえか、おはよー」

「・・・明久、おはよう。」

「明久君。おはようございます」

「今日はいよいよ振り分け試験だな」

「………みんな、同じくクラスがいい。」

「そうですね。みんな同じクラスがいいですね。」

「大丈夫だよ。」

そんな会話をしていると文月学園についた。

「おつ、振り分け試験の教室が張り出されているぜ。」

「ん、あ。ボクと瑞希ちゃんと、翔子ちゃんはいっしょだけど、雄二は別の教室だねえー」

「本当ですね。では雄二君はまた後で。」

「………雄二、試験がんばって。」

翔子ちゃんに応援されて、雄二は……………

「お、おうがんばるな／＼／＼／」

照れていた。まったく、二人とも両思いなのに……

「んじゃね雄二、」

「明久！お前へマやらかすなよ！」

「わかってるよ。」

ボクと瑞希ちゃんと翔子ちゃんは雄二と別れて教室に向かった。

~~~~~翔子SIDE~~~~~

今日は絶対あの人に勝つ！

そんな気持ちで試験を待っていた。

「……瑞希。」

「なんですか？翔子ちゃん」

「……瑞希、今日は顔が赤い、大丈夫？」

「べ、べつに大丈夫ですよ。今日は私元気ですから。」

瑞希は、昔から嘘をつくのが下手だ。でも、一生懸命がんばろうとしている。私は邪魔できない。

「・・・そう。無理しないでね。」

その後試験が始まった。いまは、日本史だ。私と雄二の得意科目。

ガタッ

瑞希が倒れてしまった。

「「瑞希！！（瑞希ちゃん）」」

明久もそれに気づいて、瑞希に駆け寄った。

「吉井、霧島、試験中だ。席につけ。」

「・・・保健室につれていかないと。」

「翔子ちゃん。ボクもいくよ。」

「し、試験中の退席は無得点になるんだぞ。それでもいいのか。」

「・・・友達をほつといて試験なんて受けられません。」

「か、勝手にしたまえ。」

なんである教師はそこでも酷いこといえるのだろう。



ともかく私と明久は瑞希をつれて保健室にいった。

## ボクと波乱と振り分け試験（後書き）

感想、質問、アドバイスなどよろしくお願いします。

## 雄二と野望と新学期（前書き）

前回のあらすじ

振り分け試験中に瑞希ちゃんが倒れてボクと翔子ちゃんは瑞希ちゃんを保健室につれていった！

b y 吉井明久

## 雄二と野望と新学期

雄二SIDE

このくらいの問題なら余裕だな。

明久たちも大丈夫だろう。

ん？だれかがろうかを走っているな。

途中退席か。

・・・・・・・・・・。

おかしい。俺の幼馴染にそっくりだ・・・

あ、あれは明久と翔子か？

瑞希が倒れたのか。

俺一人Aクラスにいても意味がねえな

そうだ！アノ手があるじゃねえか

たしか、Fクラス代表の点数は大体1000くらいだな

下剋上のスタートだ！

-----

新学期

明久SIDE

「明久君！おはようございます。」

「あ、瑞希ちゃん。おはよー！」

「ところで、振り分け試験のときの熱はもう大丈夫？」

「はい。おかげですっかりよくなりました……ゴホゴホ」

言葉とは裏腹にまだ本調子ではないようだ。

「本当に大丈夫なの？あんまり無理しないほうが……」

「大丈夫ですよ！このくらい。」

会話をしているうちに雄二と翔子ちゃんに会った。

「おはよう！二人とも」

「「おはよう。明久」」

「それにしてもさ、雄二がFクラスの代表になるように点数操作した、ってきかされた時はびっくりしたよ。」

「・・・私も驚いた。」

「だって俺一人別のクラスいってもつまんねえからな。」

「みんな同じクラスになれてよかったです。」

「おはよう。吉井、坂本、霧島、姫路。」

文月学園についた途端聞こえたドスのきいた声・・・・・・まさか。

「「おはようございます。西村先生。」」

「「おはようございます。鉄人。」」

「はあー。なぜ貴様らはいつまでたっても『西村先生』と呼べないのか」

「「すみません。西村先生」」



翔子ちゃんと瑞希ちゃんが律儀に謝る。二人共すごいなあー。鉄人  
なんだからそんなに謝らなくてもいいのに

「まあいい。受け取れ。振り分け試験の結果だ。坂本は別として3  
人とも残念だったな。職員会議で半分に意見が割れてな。そして学  
園長も『それが学園の決まりさね。』といってな。」

驚いた。鉄人が生徒をそこまで思っているなんて。

「吉井。霧島。お前らの行動は友達思いで勇気ある行動だと思うぞ。」

「ありがとうございます」

因みに結果はいうまでもないけど

ボク、瑞希ちゃん翔子ちゃんはFクラス

雄二もFクラスだったけど狙い通り代表だった。

こうして波乱の新学期が始まった。

## 雄二と野望と新学期（後書き）

ここまでが長い（笑）

## ボクとみんなとFクラス（前書き）

更新遅れてゴメンナサイ>（―――）<

―――  
あらすじ

全員Fクラスになった

by 坂本雄二

## ボクとみんなとFクラス

翔子SIDE

私達はFクラスを目指して雑談しながら歩いていた

「すこし来るのがはやかったみたいだな」

「そうですね。そういえば噂に聞いたことがあるんですけど・・・」

「一年生のときに二年生の設備のことって聞かされてなかったじゃないですか。それで、噂をきいたんですけど・・・Fクラスの設備って卓袱台に腐った畳に座布団とかという噂をきいたんですが、それって本当でしょうか？」

「ボクはFクラスの設備のことは聞いたことないけど、酷いってよく聞くよ。」

「・・・私はあんまり聞かない。でも瑞希がいったほどひどいとは思わない。」

「ですよ。そんなにひどくはないと思いますね」

「そんな廃屋あるわけねえだろ」

「・・・ついた。」

改めて見て実感した、瑞希が聞いた噂は正しいのではないかと。

そのことはやはりあたりで教室のなかを入ってみると  
酷いという言葉しかでてこなかった。

-----

雄二SIDE

思ってた以上にひどい設備だな。

やはり『戦争』を起こすしかない。

「雄二、明久、おはようなのじゃ。」

この独特のしゃべりかたは・・・俺たちの友達、木下秀吉が話しかけてきた。どっからどうみても美少女にしか見えない顔をしているが、れっきとした男子だ。まあほとんどの奴が認めようとしないが。

「それに、なぜ霧島と姫路がここにいるのじゃ？そして、おぬしらは成績はよかったはずじゃ？」

「あ、じつはね秀吉・・・・・・・・・・」

明久が秀吉の説明をしていた。

「なるほどのう。でももう一度試験をできるのではないか？」

「それがな、お偉い学園長サマは認めないんだとさ」

そんな会話をしているとつぎつぎと野郎共（蛆虫野郎）がはいってきた、全員、翔子と瑞希と秀吉をみて『眼福じゃー』といいながらはいってくる。俺の大切な友達に手でしたら

タダジャオカナイカラナ

俺は全員きたのを確認し、教壇？にあがった

## ボクとみんなとFクラス（後書き）

感想まってます







## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7132w/>

---

ボクと仲間と召喚獣

2011年12月25日13時49分発行